

一言・ふたこと

猫に小判ということがある。大学の図書館は所有冊数もさることながら、利用度で誇るべきものであろう。農学部図書委員となり、その利用度が増すことに専心努力してきたつもりであるが、いかんせん利用度は外国の十分の一にも達していない。私が1年留学した、アメリカの教授は専門分野・研究内容別にリプリントかコピーでファイリングをしているが、個人所有の本は講義用テキスト位のものしかもっていない。学生にしても同様で総て図書館を利用している。どうも日本人は自分のものとして机の横に置きたがる癖がある。アメリカでは理科系の学生ならば1日70~100ページ、文科系では200ページ前後の参考文献を読まれ、時として時間を予約して読まねばならぬことがある。これらは先生の指定したものであるが、本学部でもそれに類する指定図書の利用度は高い。いま一つアメリカ

の大学では図書館が一
つに統一されているこ
とである。従って重

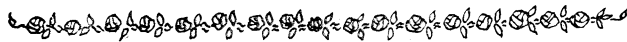
— 図書は眠っている —

— 図書館制度の改革を —

↘ 複図書はテキスト
を除いてほとんどな
く、当然雑誌の種類
も豊富である。本学

部においても重複雑誌だけはなんとか整理したいものである。図書館が統一され一つの場に集中されると、読む人と場のふんい気に刺激され、また読まねばならないものもわかり、負けまいとする競争心もわいてくるのではなかろうか。けっきょく利用度は各人の自発的ファイトによるものかもしれないが、図書館の環境をよくすると同時にサービス面でもっと人をうまく動かすよう努力することも大切である。UCLA では読む人の立場に立ってカラーコンディショニングをしているがその中には草木、花に至るまで含まれている。日本ではほど遠いことかもしれないが、大学全体としては今後の問題として是非考えるべきことである。ともあれ図書は眠らせておくものでなく、活かすものであり、その生殺権は利用者・指導者とサービスに当る人の努力によるものであろう。

(農学部助教授・獅山慈孝)



図書の利用となると、やはり身近にある農学部図書室ということになる。附属図書館と違って小規模ではあるが親しみが感じられる。暇な時を見つけては、気軽に雑誌や新聞に目を通すこともできる。一方、書籍についてみると、一般に学部図書館となるとどうしても専門書が多くなり、逆に基礎科学に関する書籍が少なくなりがちである。しかし、これらはちょうど、われわれが語学を勉強する際に、辞書を常に側に置いておくのと同様、専門書を読む

に当たっても、是非必要
なものである。この種
の書籍の不足という

— 図書収集の盲点 —

— 農学部図書室を利用して —

↘ 点では農学部図書
室も例外ではない。
また、各大学やその
他の研究機関等（特

に海外の）から出版された文献で、本学に備っているのが意外と少ないのに驚くのだが、こういった種類の文献を入手するためには、やはり本学図書館が積極的に海外の各大学等との交流を計るべきであろう。その他、雑誌類の選択についても、もっと広範な視野からなされることが望まれる。

(農学部 T.H.院生)